



大島です。前号 No.6 からのスパンが非常に短いです。テストや成績のつけ方の話の量が、思いのほか多かったので、このようになってしまいました。こちらでは、2学期に取っている科目の説明やその他のことについて、様々書きたいと思います。

## ● 2学期の科目たち

1学期と変わらず、1コマ85分（金曜のみ60分）です。これに関してはもう慣れました。帰国してからの45分授業に暫く驚きそうではあります。

本題です。僕が2学期に選択した科目は次の4科目です。

- ・ Calculus 12 … 1学期の Pre-Calculus 12 と違い、本格的に極限や微分、積分を学習し始めます。
- ・ Explorations in Social Studies 11 … 第二次世界大戦以降の現代史を「映画を通して」学習します。
- ・ Physical Education 11 … 体育です。男女合同でやるのが日本とのいちばん大きな違いだと思います。
- ・ Electronics 11 … 日本の中学で学習する技術のうち、電気分野をより詳しく、深く学習します。

## ● TOTEM 65

3週間前に、TOTEM と呼ばれる、バスケットボールの大きなトーナメントがありました。今年で65回目を数える、BC州で最も歴史のある、シニアバスケットボールトーナメントです。

大会の規模もその他の応援等も想像をはるかに上回る大きさでした。多くの試合がテレビ中継やラジオ中継（全国区ではなくローカル局ですが）され、また YouTube で配信されたり、しっかりとした実況が入ったり、試合と試合の間には、ダンスがあったり、小学生チームのエキシビジョンマッチがあったり、近くのピザ屋が校内に出店を出したり、グッズの販売があったり、観戦にはチケットを買わなくてはいけなかったり、荷物検査をされたりと本当に驚き尽くめでした。

チケット料金は12歳以上が1日当たり8ドル（初日のみ5ドル）、3日分のパスが15ドルです。

さらに、テレビ局やラジオ局の人を除いて、すべてボランティアで成り立っていることを知り、非常に驚きました。Leadership という授業を取っている生徒たちが企画し、実際に中心となって運営をしているそうです。そのような意味では、創作展ととても似ているなと思いました。1学期の授業で選択しておけばよかったと今更になって後悔しています。



結果ですが、今年は男女ともあまり良くなかったのが少々残念です…



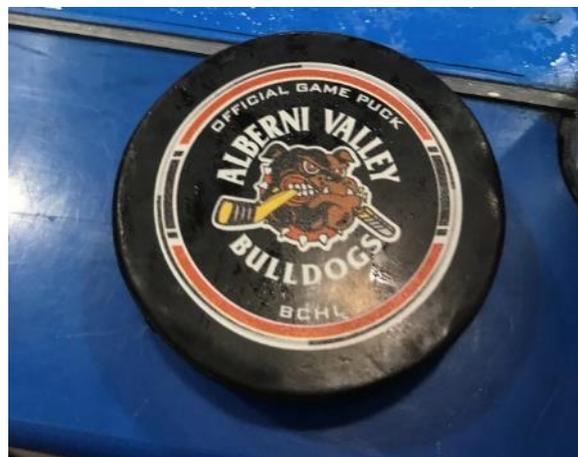
上の写真2枚は、試合と白熱する応援の様子。

左の写真は、様々なグッズの写真です。パーカーやTシャツ、タオル、キャップなど、本当にたくさん種類がありました。いちばんの人気商品はパーカーのようでした。



## ● ボランティア活動

年が明けてからアイスホッケーの試合のボランティアを始めました。仕事自体はそこまで難しくないので、正直なところ助かっています(笑) また、ゴールのすぐ近くで仕事をしているので、パワープレーを文字通り目の前で見る事ができ、席で観戦するのよりも何倍も楽しいです。ただ、リンクを冷やすための冷却水が真下を流れているので、足元が非常に寒いのが唯一の難点です。ちなみに、この前の試合でパックが飛んできました。ホームランボールとは多少違いますが、打ち損じでリンク外に飛んできたパックは持ち帰ることができます。良い思い出となりそうです。



## ●LGBTQ+ について

最後に、LGBTQ+ のことについて触れたいと思います。LGBT という単語はご存知の方が多と思いますが、こちらでは、Q+ を付けることの方が多です。Q は Questioning の略で、LGBT のどれにも当てはまらないセクシャリティを持つ人や、敢えて決めない人を表します。また、これらはセクシャリティのごく一部でしかなく、世の中にはもっと多様にセクシャリティがあるという意味を込めて、+ が付けられます。

社会の授業では、最初の授業で簡単な自己紹介シートを書くように求められましたが、その中に「代名詞」という項目がありました。生徒が自分に対して使ってほしい代名詞を指定できることは非常に良いことだと思いました。また、無性別三人称単数の主格代名詞は it ですが、これが人をさすときには単数であっても they と呼ばれることが多くあります。

他にも、LGBTQ+ の人のためのクラブがあったり（もちろん正式）、トイレには必ず「Trans Welcome」と書いてあったりしていて、多様性やそれへの理解の具合を日本と比

べ、格段に身近に感じることができます。これは個人的な意見なのですが、日本の学校、と言うよりも社会全体としてLGBTQ+ について触れることを敬遠しようとする雰囲気があると思いました。もちろん、そういった人たちを不用意な言動で傷つけないために、という目的があつてのことだと思いますが、逆にカナダの高校では、授業でLGBTQ+ をテーマとした文章（僕が読んだのはこうした人への差別が今よりも非常に激しかった 1950 年代に出版された自伝）を読んで、その内容についてディベートする、ということがあります。LGBTQ+ の理解を、多くの議論を通して深めていく。もし、その中で誤解があればそれをクラスメイト達と先生が解いていく、というように感じ取ることが出来ました。LGBTQ+ について、しっかり理解ができている、またその土台がしっかりしているからこそ、欧米諸国特に若い人を中心にカミングアウトをしやすいのではないかと思います。



それでは、この辺で終わりにしようと思います。  
読んでくださった皆様ありがとうございました。

大島